

中と稱す、這回、日露の平和破裂して、將に出征せんとするや、特に勝峰大徹(南禪寺前管長)に見えて訣別を告ぐ、師、贈るに絡子を以てす(絡子は禪僧の常に着けるもの)氏大に喜び、愈出征し、先頃の南山の役にて、奮闘縦横、遂に名譽の戦死を遂ぐ後、その死屍を檢すれば、軍服の間に、絡子を纏へりと云ふ、また聞く所に依れば、鎌倉圓覺寺の開山、佛光祖元禪師の乾坤無_レ地卓_二孤筇_一。且喜人空法亦空。珍重大元三尺劍。電光影裡斬_二春風_一の詩は、その愛誦して措かざる所なりしと云へば、渠が如何に、彈煙砲雨の間に猶ほ生死相關らざる底の別乾坤ありしかを知るべし。

因に記す、佛光祖元禪師の此詩は、師が猶ほ支那にありし時、大元の兵迫つて禪師を斬らんとするに、師は神色自若として、徐に此詩を詠ぜられければ、元の兵その凡僧ならざるを知り。遂に去りたりと云ふ、

禪師後に我國に來り、鎌倉圓覺寺の開山となり、鎌倉武士を指導し、殊に彼の元寇の國難に際し、ますく我國威を發揚したる北條時宗の如き、深く師の提撕を受けたるは前に記する所の如し。

○愚庵

愚庵は磐城國平の産、十五歳の時維新の奥羽戦争に出陣し家に歸れば父母兄弟離散して往く所を知らず、後一人の兄氏と與に四方を歴尋して得ず、明治七年征臺の役に従軍し後同十一年清水の次郎長事山本長五郎の養子となり、富士野の開墾に従事し、十六年去て東京に出て十八年大阪に來り内外新報に従事し一念孝道を離るゝ違なく、其間或は寫眞師或は神官と爲り苟も父母を求むるに便なるべき種々の苦心を積むと雖も遂に現世に再會する能はざるを諦め、二十一年三十四歳を以て京都修學院の林丘寺に入り滴水禪師の室に得度し。二十四年京都清

人に草庵を結び愚庵と號し、後伏見桃山に移りて遂に圓寂す。

覺書

- 一金銀米穀に不足なければ今日より一切の贈物を受け申さす
 - 一御見舞の御方は一面の後直に御引取被下候が第一の御心切と存候
 - 一死後は遁世者の儀に付葬送を爲すことを許さず
 - 一又塔を建つるを得ず
 - 一學術上に補益ありとせば遺骸を解剖するも不妨
 - 一遺骸は二三法弟に依て荼毘せしめ近親と雖葬送するを許さす
- 右の箇條には何人も容喙するを得ず

明治三十七年一月十四日

愚庵主人自記

遺偈あり曰く

氷魂向水散。

鐵骨入苦穿。

月下人尋否。

梅花白處煙。

其又辭世に曰く

大和田に鳥もあらなくに梶緒たえ

たよふ船の行へしらすも

○湘煙女史

湘煙女史の才學は人の皆稱する所、渠また常に心を傾けて大に得る所あり。その臨終に及ぶや自ら筆を執りて曰く、

牡丹見て芍薬を見て吾逝矣

立がけに賜はる母のむすびかな

藪入に鳥渡そこまてひとりたび

○獨園の追悼會

荻野獨園の逝くや、道友相集りて追悼會を營む、此日諷經せず、拈香せず、唯一幘の馬の畫に各々讚をなす。

鳥尾得庵曰く

鹿と云ふも妨けなし

由理滴水曰く

馬鹿いふな

松原舜應曰く

馬鹿いふな眞の馬だ

竹田黙雷曰く

そんなことは塞翁の馬だ

橋本岷山曰く

竹筥があるぞ

中原東嶽曰く

うまいく

河合清九曰く

叱々

鈴木無隠曰く

阿房の戯れ

堀龍屋曰く

何とでもさへ

禪 觀 錄 終

近松門左衛門を論ず

近松以前の日本文學と佛教……遠室と祖門古澗……淨瑠璃作者とし
ての近松門左……近松戯曲中の佛教……近松門左の人生觀と佛教……

・近松門左の人物

近松以前の
日本文學と
佛教
近松以前の
佛教趣味の
日本文學に
加はるや由
來頗る遠し
、聖徳太
子漢字一萬
三千字を制
して我が國
語を表出す
の便に
供せしめたまひしより此に日本文字の源を闢き、次て弘法大師平假名四十八字を制定して佛教甚深の理を歌ひ且つ梵語悉曇の組織を應用して片假名五十音を創始せられしより日本文學は自ら一生面を開き、一方佛教の輸入と共に漢文學の旺盛を來し、聖徳太子の憲法十七條は簡古にして尙書の風ありと賞へられ、弘法大師の性靈集は以て六朝の秀才と比肩するに足り、淡海御船の集めたる懷風藻は佛教趣味の津々た

るを見、一代の儒宗菅原道眞の菅原文章も亦佛教趣味を逸する能はざるを認むると共に、他方に於ては竹取物語早くも寶樓閣經の意を譯したりと傳へられ、紫式部の源氏物語は、琵琶湖畔の明月に色卽是空の理を艷麗の筆を以て大般若經の裏に綴られしと稱せられ、其幽遠なるの想其高尚なる見地は法華の玄義より出てたりと云はれ、清少納言が瀟洒なる筆はまた佛教の養成する所たるを疑ふ能はざらしめ、下て平家物語、源平盛衰記に至ては、盛者必衰會者常離の佛理を描出したる者とも見るべく、星月夜鎌倉の代となりては文學の權は全く僧侶の手に落ち、西行法師の山家集、頓阿法師の草庵集の佛教文學の鼓吹たるは云ふまでもなく、鴨長明の方丈記、吉田兼好の徒然艸に至ては、洒脫の筆を以て佛教の想を描き、漢文學も亦禪風の宣揚と共に詩文の事は全く五山の專有に歸し、虎關、絶海、義堂の如き文豪相繼て起り、室

町の末となりては巧みに和漢文を調和して舞樂に適せしめたる謠曲なるもの出て、一休、正徹の諸師、流麗の筆を弄して深遠の佛理を謳ひ事に托して草木成佛を示し、景に托して溪聲廣長舌を説き、以て教化の幾分を補す、此時に當り和歌はまた一轉變の機に接して連歌なるもの流行し來り、此連歌に従事するもの亦多くは僧侶なりければ、神官たる伊勢の守武が或る席にて「御座敷を見ればみなく神無月」と云ひ、宗祇法師がこれに和して「中に時雨のふり烏帽子着て」と吟じしは、一場の諧謔として傳へらるゝと雖も、亦以て中古の文學が全く僧侶の手にありしを知るに足らむ、此謠曲より一轉して今日の所謂淨瑠璃となり、此連歌より一轉して今日の所謂發句となりぬ、發句に於ては貞徳あり、宗因あり、而して松尾芭蕉に於て大成せらる、淨瑠璃は其起源を詳知するに難しと雖、足利の末世に出てたりと云はるゝ「淨瑠璃

十二段草子」蓋しこれが祖ならむか、爾後富永平兵衛、津打治兵衛等の作者ありしも、未だ以て文家として目するに足らず、殆んど芭蕉と同時に近松門左衛門あり、以て此淨瑠璃に一生涯を開きこれをして九地の下より九天の高さに達せしめき。

遠室と祖門

近松の傳記は諸説紛々として一定せざるも、太田蜀山

古澗

人が浪華の梅園主人の爲めに作りたる「近松翁碯」は先

づ彼れが兄弟を叙して

伯出家爲相國寺長老、仲善醫稱岡本一抱子、叔爲翁、季女錦江爲諸師、擅其名。

と彼れが家は長州萩の人にして武門の家に生れたりしも、伯は相國寺に入りて宗長老と呼ばれ、仲は學醫として聲名あり一代の著書今に傳はるもの少からざる岡本一抱子なり、而して妹は俳諧を以て名ある錦

江なりとせば、彼れが家庭は尋常一様、武これ事とするの家にあらずりしを知るに足らむ、彼れ此家庭に養成せられ幼にして穎悟、年僅に十三、父母の膝下を辭して馬關に赴き、以て學を修めむとす、適々肥前唐津近松寺の遠室和尚來りて馬關に在り、一見これを異とし、伴ひ歸りて授業得度せしめ、名を祖門と改め古澗と號せしむ、世々甲冑の家を生れたるの彼は此に於て三衣一鉢の徒となり、朝に參じ暮に參じ、工夫少しも怠らず、閑あれば内は經典祖錄より外は諸子百家の書に及び通曉せざるなし、舞鶴城畔風清く、虹の松原白砂長へに連る唐津の地は彼をして優美の想を養はしめ、雨黒く波荒る、玄海の濱は彼をして崇高の念を生ぜしめ、螢雪こゝに十春秋、遠室和尚夙にこれに衣鉢を傳へんとす、古澗辭して曰く、われ一枝の筆を以て教外別傳の旨を傳へむとす、法席を繼ぐは忠にあらず、希くは席を法弟明竺上座に

傳へよ、われは出て、四方を漫遊し其志す所を行はむと、和尚之れを許す、古澗大に喜び諸州を歴遊し（近松寺を辭するの後播州に至りて佛智弘濟禪師盤珪に參じこゝに大事了畢すとの説あり現に同地綱干の人これに予に語りき、年代相應ず大に考ふべし、盤珪弟子四百餘人精舎のすたれたるを修るもの四十七宇、當時海内無雙の高徳と稱せらる、彼れが此れに參じて大事了畢したるや否やは知らずといへども、京師に上るの途次幾日月をか此會下に消したるは疑ふべからざるに似たり）京師に入りて錫を岡本一抱子に止め、こゝに蓄髮して一條家に仕へ、相森平馬信盛と稱し、累進して從六位に叙せられき、彼れは久しく四方に放浪して地方の風俗を知り得たりき、今は京都に在りて縉紳の家に事へ都の手振を觀察し得たり、彼れは經書を讀み佛典を學び而して又神道の書を閲したり、彼れは當時に於けるすべての方面を學び、ま

たすべての方面を視察したり、幾もなく彼れは致仕して市林に隠れ、靜かに人情の幾微を察し、世態の祕密を知得したり、彼れが人情詩人としての修養は殆んど全きに達せり、彼れは其僧侶的生活を改めて仕官の身となりし如く、今や官を辭して市林に隠れ自己が開拓すべき新天地を認め、これに向て自己の特色を發揮せむとせり、此に於て彼れは全く淨瑠璃の作者となりぬ、淨瑠璃作者としての彼れは祖門古澗としての彼れよりも、相森平馬信盛としての彼れよりも價值あるものなりき。

淨瑠璃作者とし

ての近松門左

時は是れ、徳川の流清く千代田の御濠、浮鷗夢穩かにして、人は豪奢を衒ひ、勇武の氣風去て、文弱の弊漸く來らむとし、覇府に遠き京阪の地も亦時つ風枝を鳴らさぬ松平の恩澤に浴して、町人百姓まで風流韻事を弄び、殊に歌舞の伎はさすがに

王城の地とて其隆盛なること遙かに江戸に越え、宇治嘉太夫、井上播磨の如きは各一家を爲して其伎を争ひ、斯道の神と稱せらる、竹本義太夫は其間に蟠居して一世に雄視したり、信盛仕を辭して其近松寺にありしに因みて近松門左衛門と稱し、又平安堂巢林子等と號して著作に従事するや、初めは都萬太夫なるもの、爲めに作る所ありしが、後宇治嘉太夫の請に應じて數番の淨瑠璃を作り、更に井上播磨の爲めにも數番を著述し、終には竹本義太夫の立作者となり、交情も亦頗る密に、近松なくんば義太夫の妙伎も人を感ぜしむるに足らず、義太夫なくんば近松の妙文も人に知らるゝ能はず、此二者相合して元祿の文物に偉大なる光彩を添へき、されば正徳四年義太夫が近松に先ちて逝くや、近松は實に其畫像に賛して

堪能の人のいひしは節に節あり節に節なし、言葉に節あり言葉に節

なし、語るに語りて節に語るなと此六句のものは得易き様にて得難きのみ、よく得たる人は誰ぞや、

前筑後椽藥原博教

一ふしを語り残してうつし繪に

今も聲ある竹のおもかけ

と、筑後椽とは即ち義太夫が事たり、節に節あり節に節なし語るに語りて節に語るなと、これ堪能なる人の言にあらずや、節に執し語に執す何ぞそれ妙致を得む、不即不離の所に妙道存す、これを看破しこれを行するもの豈に尋常者流の企及し得べきことならむや、義太夫にして初めて此事あり、近松にして初めて此事を傳ふべし、修證不二の理必ずしもこれを経文祖録の中にのみ求めむや、大道現前、何人能くこれに接觸する、近松が文を屬する猶ほ義太夫の淨瑠璃を語るが如く、

能く不即不離の中にありて其妙を發揮す、彼れが豪傑を寫すや自ら豪傑となりし、嬌婦を寫すや自ら嬌婦となりし、義理に迫れる龜屋治兵衛を描くや自ら義理に迫るの龜屋治兵衛となり、樓門に紅を流すの錦祥女を描けば自ら樓門に紅を流すの錦祥女となり、然かも同じて之に執せず能く自家の立脚地を知りてこれを差別せるが故に、各種の人物は各種の性格を具して毫も矛盾せず、平凡なる作者が其衣を別にし其地位を異にするも作中の人物皆な同一人の權化たる如くならしむるの拙に陥らざるもの、實に彼れが能く其不即不離の妙を得たるを知るに餘りあらずや。彼れ曾て人に語りて曰く、藝といふものは實と虚との皮膜の間にあるものなり、成程今の世は實事に似るを好む故、家老は眞の身ぶり口上を寫すを善しとすとて眞の家老が立役の如く顔に紅脂白粉を塗る事ありや、又眞の家老などが顔を飾らぬとて頭のはげ

なりに舞臺に出て、藝をなさば慰になるべきや、皮膜の間といふは是れなり、虚にして虚にあらず實にして實にあらず此間に慰みがあるものなりと、虚實皮膜の中これ實に離不離の中道にして、眞正の美は此中に發揮せらるべきなり、彼の理想を主とするものは空漠に失し、寫實を主とするものは卑俗に流る、理想と寫實との中間に於て予は眞の詩美を發見せむとす、近松は實に能く此妙を得たり。而して彼をして此妙に悟入せしめたるもの何ぞ彼がれ近松禪寺に參得したるの結果なるなからんや。

近松戯曲 近松は佛教によつて養はれたるの人なり、其百餘番の

中の佛教 淨瑠璃、世話たると時代たるとを問はず、悉く佛教想の發揮たらざるはなし、殊に其文字に至ては佛經の文句を縦横自在に應川し、圓轉滑脱殆んど妙を極む、彼れと同時にして驕豪、人に下ら

ざりし物徂徠をして賞賛措く能はざらしめし、「曾根崎心中」の

此世の名残夜も名残、死に、行く身を譬ふれば、仇しの原の道の霜
一足づゝに消えて行く、夢の夢こそ哀れなれ、あれ數ふれば曉の七
つの時が六つなりと残る一つが今生の鐘の響の聞きをさめ寂滅爲樂
といひくなり、

といへる如きは云ふまでもなく、「凱陣八島」に

世に逢坂の關の戸を叩きて明くる空見れば汝もわりなき方にこそ花
を見捨つる雁金も同じ越路の旅なれど心異なる憂身とて、見しや見し
らぬ人にさへ、忍ぶ小笠の深々とふかき思ひの種をしも、如何なる
代にか蒔置てはからぬ旅の道急ぐ、ゆん手は三井の古寺や、此鐘の
つくく、物を觀するに、一策一落春秋と移りかはれる定めなき、實
にも如夢幻泡影と法の教へは聞きながら、など厭はぬや假りの世を

いや果敢なくも悟りえぬ流轉生死の海にのみ、沈みつ浮いつ、浮い
つ沈みつ行く船は、さしもぞ寄する漣や志賀の濱松年古りて誰が代
に引ける子の日ぞや

の如き一語一句の中に佛語を引用せざるなく、「四大海は汲干すとも人
の心は汲まれぬぞや」「ゆふべあしたの鐘の聲、寂滅爲樂と響けども聞
て驚く人もなし、野邊よりあなたの方とは血脈一つに珠數一連是が
冥途の友となる」の如き妙句少からず、殊に「一心五戒魂」の如きは遠
藤武者盛遠が昔しの戀を叙して殺生偷盜妄語邪淫飲酒の五戒を示し、
「遊君二世相」は狛野左京盛光の妻が繼子春姬を憎むことを叙して三世
因果の道理を明にし「嵯峨天皇甘露雨」に於ては藤原仲成か六道に變生
することを記して輪廻の説を示し、「大原問答青葉笛」に於ては熊谷蓮
生坊を叙して法然上人の口を藉りて念佛往生の要義を平易に説き、其

「釋迦如來誕生會」に於ては先づ、

是の如く我れ聞く、九土まぢく／＼に別れ四生俗を異にす、長へに火宅に遊び共に苦海に沈む、かるが故に能仁大師法界を總て我が智とし虚空を悉して我が身とし、一切種智の光明に蠢々たる懷生、喞々たる哨類草木國土悉皆成佛の氣を與へ六通自在の神足に、魔軍筵の如く捲て現世安穩の益を施し三千世界三世の衆生惠日に照す大恩教主

と書き起して、釋迦牟尼佛の御傳記を叙し、玉盤上に珠を轉ずる如き筆を以て耶輸陀羅姫の情緒纏綿たるを示し、老病死の遠離すべきを説き、「風破窓を射て燈火消え易く、月疎屋を穿て夢なり難し秋の夜ながら處から物凄しき山陰に岩木を友と墨衣」の難行苦行を綴りては人をして覺えず感涙に咽ばしめ、成道より轉法輪に至り更らに入涅槃を叙

し「佛法守護の諸天神、國を守り世を守り民を守つて民安全、悟り開けて身もやすく心も廣き天地のあらん限りは盡せぬ衆生末法萬年萬々年、無上の榮華を極めける」とて筆を擱きぬ、アーノルドの、亞細亞の光を以てのみ釋尊の傳記は光明を放ちたりと思惟するの徒若くは萬享應賀の「釋迦八相」を以て世尊の髣髴を窺ひ得ると爲すの輩希くは來て近松が此「釋迦如來誕生會」を讀め、もとよりこれ偉人の傳記、戯曲としての價值は深く之れを問はず叙事詩としても亦優に一地を挺くの著たるを疑はず、想ふに近松が佛教の素養が如何なる程度まで爲されたりしやは本書これを説明して餘りあらむ、此他「聖德太子繪傳記」の和國の教主を叙せる、「日蓮上人記」の法華の宗祖を記せる、「用明天皇職人鑑」の佛敵降伏を描けるの類少からず。予は實にこれらの作のみに於ても近松が優に佛教文學者として立つべき價值あるを疑はず、然か

も彼れの以て佛敎文學者と稱せらるゝは彼れが佛敎的修養を有するのみにあらず、又彼れが佛敎に夤縁あるものを著述したるのみにあらず、彼れの人生觀は全く佛敎の見地にして、彼れのすべての作は實に其佛敎文學者たるを表白してこれを疑ふ能はざらしむ、

近松門左の人生

觀と佛敎

桃花流水杳然として去り別に天地の人間にあらざるあり、佛敎の人生觀は一面に於て超理想主義にして、此の娑婆を以て即寂光土とすると共に、他面に於ては合理的進化主義と同じく希望を未來に繋けて現世を以て唯だ汚濁極りなきものとせず、近松の人生觀も或點に於ては娑婆即寂光土の主義なると共に或點に於ては希望を來世に繋げり、「人間一人生るれば乳房といふ天道の御扶持方、正直に家職勤むれば分限相應々々に天の乳房が備はる」と云ひて此世を喜觀し、更らに自業自得の理を按じて「天道も日月も神も佛も

罰はあてはなされぬと此方から罰の下にあたりに往く」と云ひ、未來の榮光を認めては「夫よく此身體は地水火風死ぬれば空に歸へる五生七生くちせぬ夫婦の魂」と云ひ、人生一切の出來事を自己の所存(因)と社會の境遇(緣)とによつて生ずるものとし、其人物の性情と社會の境遇との衝突を描寫し、これが一致を以て喜劇の終極とし、これが衝突を以て悲劇の大團圓とし、世話物の多くは此悲劇的大團圓を有し、時代物の多くは此喜劇的終局を有す。彼の蜀山人が近松翁確に。

匹夫匹婦之諒、失死但斃、名曰心中、此風靡然、害於其政、

と云へる心中物は多く悲劇の終局として用ゐられたるものなり、此に於て人或は近松の淨瑠璃其名作と稱せらるゝ世話物に於て心中の多きは佛敎厭世の風によつて感化せられたるに由ると爲し、以て人生の健全を傷くるの害物と爲すに至る、想ふに心中なるもの世になかりせば

——即ち世に心中の先例なかりせば——人生を害すると少からざるべしといへども、彼の心中を描くは彼れ自らかゝる厭世の福音を傳へんとて創始したるにあらず、彼れは人生詩人の天職として「心中」なる事實を視察してこれが動機を探究し以て一個の世話物とはなしたるなり、されば彼れの心中は皆な世を厭ふてかくなせしにはあらずして自ら生きんことを欲望する念盛なれど、自己の愛情(因)と浮世の義理(縁)とは相衝突して自己の生存を許さず、此に於て已むなく刃に伏すものにして其厭世的欲求に出でたるは殆んど絶無なりと云ふも過言にあらざるべし。彼れも其作中に云へる如く「世間に多い心中も銀と不孝に名を流し悲て死ぬるは一人もない」と、然り無情の極、死に至るは彼れの描寫せざる所、「冥途飛脚」の龜屋忠兵衛の如き、「心中天網島」の小春治兵衛の如き「曾根崎心中」のち初徳兵衛の如き、「重井筒」の紺屋徳

兵衛の如き、「心中萬年艸」の成田久米之助雜賀屋ち梅の情死の如き、各其境遇と性情とを異にすといへども、皆な自己と社會との衝突より已むなく死せざるを得ざるの境遇の推移を描寫せざるにあらざるはなし、彼の心中物を以て直に厭世的思想に支配せられたるものとなすは未だ人生の幾微を洞察する能はざる皮相漢の言のみ。云ふまでもなく人生には二個の方面あり、一は光明にして一は暗黒、其光明なる部面に於ては鶯花駘蕩、其暗黒なる部面に於ては金風蕭殺、一は苦の海たり涙の谷たるべく、他は喜びの世界たるべく歡樂の天地たるべし、人生を描寫する戯曲の終極は要するに此二者の一に終る、而して其暗黒に終るものは自己と社會との衝突を見るべく、其光明に終るものは自己と社會との一致を見るべし、近松の時代物を綴るや事情を過去に藉るが故に巧みにこれを想化して善因善果の理に照し以て光明に終らし

め、其世話物を稿するや、目前の事實を題とするが故に仔細に其動機を視察して其社會と衝突する所以を求む、故に一は理想的にして他は寫實主義なり、一は説明的にして他は解剖的なり、予は未だ近松の多くを讀まずと雖、其著名なるもの數十番を讀んで近松の人生觀が佛教と一致するを明言するを憚らず。

近松門左 彼れが想の佛教的なるは予既にこれを云へり、彼れの人物文の妙なるは既にこれを説けり、彼れの文は妙なり、彼れの想は佛教的なり、此を以て直に彼れを完全なる佛教文學者と爲し得べきか、予は尙ほ他の方面より彼を觀察せざるべからず、他の方面とは何ぞ、彼れの人物すなはちこれなり、彼にして如何に佛教を説くとも彼の人物にして卑野ならむか、彼れの説く所は唯だこれ筆端のみ、未だ以て佛教に養成せられたるものとなすべからず、佛教文學者

の價値は其文と其想とを見るの外、又其人物を忘るべからず、或は僧となり或は仕官の身となり、或は戯作者となる、彼れは片々たる一個の輕薄才子なるか、否なく、彼れは當時の戯作者流の輕薄才子にあらず、彼れは實に人生詩人を以て任じ、多くの教訓を後世に貽せり、彼れは如何なる野卑の事をもこれを美化するの特技を有し、此特技によつて克己と反省とを吾人に示し、彼の淫猥極るが如き心中物も彼れの筆に上りては社會道德の制裁の顯著たるを理解せしめり。彼れは好むで忠臣孝子の事蹟を綴れり、「曾我會稽山」、「世繼會我」、「團扇會我」、「基盤太平記」、「兼好法師物見車」の如きこれなり、彼れは好むで義士烈婦を寫せり「源氏烏帽折」の如き「出世景清」の如き「國性爺」の如き「信州川中島」の如きこれなり、而して彼れの人物は最も能く彼れが終焉の辭に於て知ることを得べし、

代々の甲冑の家に生れながら武林を離れ、三槐九卿につかへ咫尺し奉りて寸爵なく、市井に漂て商賣知らず、隠に似て隠にあらず、賢に似て賢にあらず、ものしりに似て何も知らず、世のまがひもの唐の大和のをしへある道々、技能雜藝滑稽の類まで知らぬものなげに口にまかせ筆に走らせ一生を嘯りちらし、今はの際にいふべく思ふべき眞の一大事は一字半言もなき倒惑、心に心をおもひて七十餘りの光陰、おもへばおぼつかなき我が世經畢んぬ、もし辭世はと問ふ人あらば、

それ辭世去ほどにさてもその後

のころさくらの花しにほはじ

享保九年仲冬上旬

入寂名阿耨院穆矣日一具足居士

不_レ俟_ニ終焉期_一豫自記春秋七十二歳

心に心を思ふ、これ尋常底の人ならむや、其終焉期を俟たずして豫め自記す、これ出離生死底の人にあらずんば能はざる所、元祿文學の精華たる近松門左は逝きぬ、而して残る櫻の花は千秋萬歳其色香を失はじ、彼れまたいふ

のこれとは思ふもあるかうつみ火の

けぬまあたなるくちさかさして

當年の祖門古澗は教外別に教を傳へぬ、文字を以て不立文字を傳ふるもの時を同うして芭蕉あり、自然詩人たる芭蕉は終に日本の詩人たるに過ぎざるべし、人生詩人たる近松は今後世界文學者研究の題目たるの時あらむか、近松の研究は大事業なり、今はたゞ其一端を洩らすのみ。

向上の精神と向下の氣風

向上とは何ぞや……向下とは何ぞや……向上と向下の調和

向上とは 向上向下の語、もと禪に出づ、永平道元禪師これを解
何ぞやして曰く、

向上といふは是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水と當體を
動かさず指す所なり。

此萬象差別の當相を躑跳し、迷語二なきの所に至るべきをいひて、

譬へば大海の水の如し、淺き處の水、深き所の水とて差別なきが如
し、衆生此心に迷ふを淺き處の水にたとへ、諸佛此心を悟りたまふ
を深き處の水にたとふ。是れ迷悟の差別なり。然れども水は本一な
り、されば悟にも住せず、迷にも止らず、只心の自在なるを向上の
一路を踏み得たる人といふなり。

といひ、其向上の一路は千聖も傳へざるを示し、更らにいふ。

若し向上の一路を知らんと思はゞ、見るべし、須彌は崩れて地に在
り、波は水を離れてなし。

と説く、語、禪家獨得の晦澁を免れずといへども、要は差別の關候を
超越して平等の境に進むにあり。煩累ある現實を出て、理想の境に入
るにあり。僞より眞に惡より善に。醜より美に向ふにあり。向ひ向ふ
てこゝに向上の一路を踏破し得べし。向上主義は進歩主義なり。

向下とは何ぞや 向下とは何ぞ。同禪師は云ふ、

向下といふは萬象總持の言句なり、諸塵三昧の心なり。萬象總持の
言句といふは是れ一心なり、一心は是れ萬法なり、山河大地は則ち
是れ我が心なり、我が心は則ち是れ山河大地なり、又法界の心體は
我が心體なり、故に肇法師の云はく天地與我同根萬物一體なり、春

生じ夏長じ秋黄冬落、これを離れぬれば智慧あれども分別の心にあらず、此の分別の心なければ則ち心歴々として明ならざる處もなく、法として照らさざる處もなし、又靈々として留る處もなし、直に無心の地に到るべし、如し此云ふ處に猶ほ不審あらば、見よ鷄寒しと木に登り、鴨寒しと水に入る。

と、蓋し平等より差別、理想より現實に向ふにあり、即ち百尺の竿頭に一步を進むるにあり、百尺竿頭に一步を進む、これ又一步を退くものにあらずや。向下の主義は退歩の主義なり。東坡の、烟山廬雨浙江潮、未到千般恨不消といふものは向上の主義なり、到得歸來無別事、烟山廬雨浙江潮といふもの、これ百尺竿頭に一步を退きたる向下の主義なり。

向上と向 向上あつて向下あり、向下あつて向上の價值益高し、

下の調和 徒らに向上を知つて向下を忘るゝものは以て世道人心を資するに足らざるなり。然れども向下の主義も亦獨存するものにあらず、先づ向上の一路を踏破してこゝに向下の主義あるなり。向上なきものに向下なし、向下あつて初めて向上の用現はる、妄りに理想を追求して之れを現實にすることを忘れ、獨り平等の境を喜んで差別の境に及ぼす能はず、自ら悟れりと爲して他を救ふことを知らざるものはこれ死學究なり、空想家なり、自調獨善の人なり。吾人は斷じて之れを取らず。昔、靈雲和尚常に人に誨へて心をして鏡の長へに明なるが如くならしめよといふ、これ心裏の妄執を拂拭し去つて此心をして佛の如くならしめむとする向上の福音を授くるなり。僧あり、問ふて曰はく「絶點絶清の時如何」と、これ妄執拂拭し去つて此鏡一點の塵埃を止めず以て可なりとなすべきかの意なり、和尚いふ「尙ほこれ眞常

の流注（眞常の流注とは妄執の義なり）と。既に一點の塵埃なし何を以て妄執とする、僧反問して曰く「向上更らに事ありや」と、和尚曰く「有り」僧いふ「如何なるか向上の事」と、和尚こゝに於て喝破して曰く「明鏡を打破し來れ。吾、汝と相見せん」と。これ實に向上の一路を踏破して、こゝに向下の門を示したるにあらずや。古歌にいふ。

雨あられ雪や氷とへだつれど

あつれば同じ谷川の水

と、これ差別の終に平等たるをいふもの、然れども更らに眼を開いて見よ、

如何なれば雪や氷とへだつらむ

とけぬも同じ谷川の水

にあらずや、向上の關門を透過してこゝに向下の路あり、向下をいふ

とを知りて向上を忘るゝものは卑俗に流れ劣惡に陥り、終に世に阿りに陥ふに至る。これに清新の空氣を注ぎ超然として進取せしむるものは向上の精神なり、向上の精神なきものは以て社會の進運に貢献する能はず、人類は永遠に向つて進歩す、吾、一日も向上の精神を忘る能はず、然れども社會は共同生活なり、吾獨り進むべきにあらずして、他をして進ましめざるべからず、こゝに於て向下の氣風亦一日も忽にすべからず、先覺者の能く天下萬衆を指導し來れるもの此向上の精神に由らざるはなく、志士仁人世を救ひ民を益する所以のもの此向下の氣風に由らざるはなし。慨はしき哉、今の時務を談ずるものに向上の精神なく、今の理想を求むるものに向下の氣風なきこと。向下の主義は墮落の主義にあらずなり、他と共に向上せむとするの主義なり。獨り進むにあらずして人と共に進なむとするの主義なり。然り眞正の

向上主義は又此向下の主義をも兼ねざるべからず。雪竇、頌あり。
 圖畫當年愛洞庭
 七十二峰波心青
 如今高臥想前事
 添得廬公倚石廬



附錄終

明治三十八年六月廿七日印刷
 同 年七月五日發行

(定價金參十錢)



同發行所
 著者
 印刷者
 發賣所

井冽堂

加藤玄光堂
 山崎孝之助
 石川金太郎
 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發賣所

大阪東區南本町四丁目
 同 東區北久太筋一丁目
 同 南區心齋橋筋一丁目
 同 京都木下町二丁目
 同 名古屋宮町一丁目
 同 東京芝布區飯倉五丁目
 同 東京芝布區飯倉五丁目

積原文衛社
 柳喜兵衛社
 松葉九書院
 貝瀬代助
 川野松次郎
 三星野松次郎
 森輪文次郎
 鴻江文次郎

東京神田區表神保町
 同 神田區小川町
 同 神田區小川町
 同 本郷區本郷一丁目
 同 本郷區本郷二丁目
 同 本郷區本郷三丁目
 同 本郷區本郷三丁目
 同 本郷區本郷三丁目

東京富土松堂
 大野富土松堂
 金昌堂支店
 東江亞英堂
 森江亞英堂
 目黒孫吉堂
 松島孫吉堂
 金昌堂
 前川文榮閣

文學博士井上圓了序 島垣默雷跋 加藤咄堂著

女性觀

定價金卅五錢 郵稅金六錢

美神の權化として崇拜すべきか悪魔の化身として厭忌すべきか本書は流麗の交と獨得の觀察とを以て女性觀の變遷歴史上の活動とを究めて社會上の地位を明にし更に戀愛嫉妬等の心理的現象を示し筆を女性の教育婦徳の養成に擱く神が魔か請ふ一讀を吝む勿れ

前東京師範學校教諭 小山左文二著

日本文法の解説及び練習

全一冊 三百八十一頁 定價金六十錢 郵稅金十錢

大學豫科、男女兩高等師範學校、各種高等專門學校、並に文部省教員檢定受驗者、高等女學校の學生及び小學校教員檢定受驗者の參考書として、著者苦心の練習問題實に一千五百餘の添ふるに、明治三十年以降本年まで八年間に於ける各種高等學校入學試驗文法及び明治十八年以降本年迄二十年間に於ける文部省教員檢定試驗文法問題の全部を以てし、一一適切に之を解説指導せり

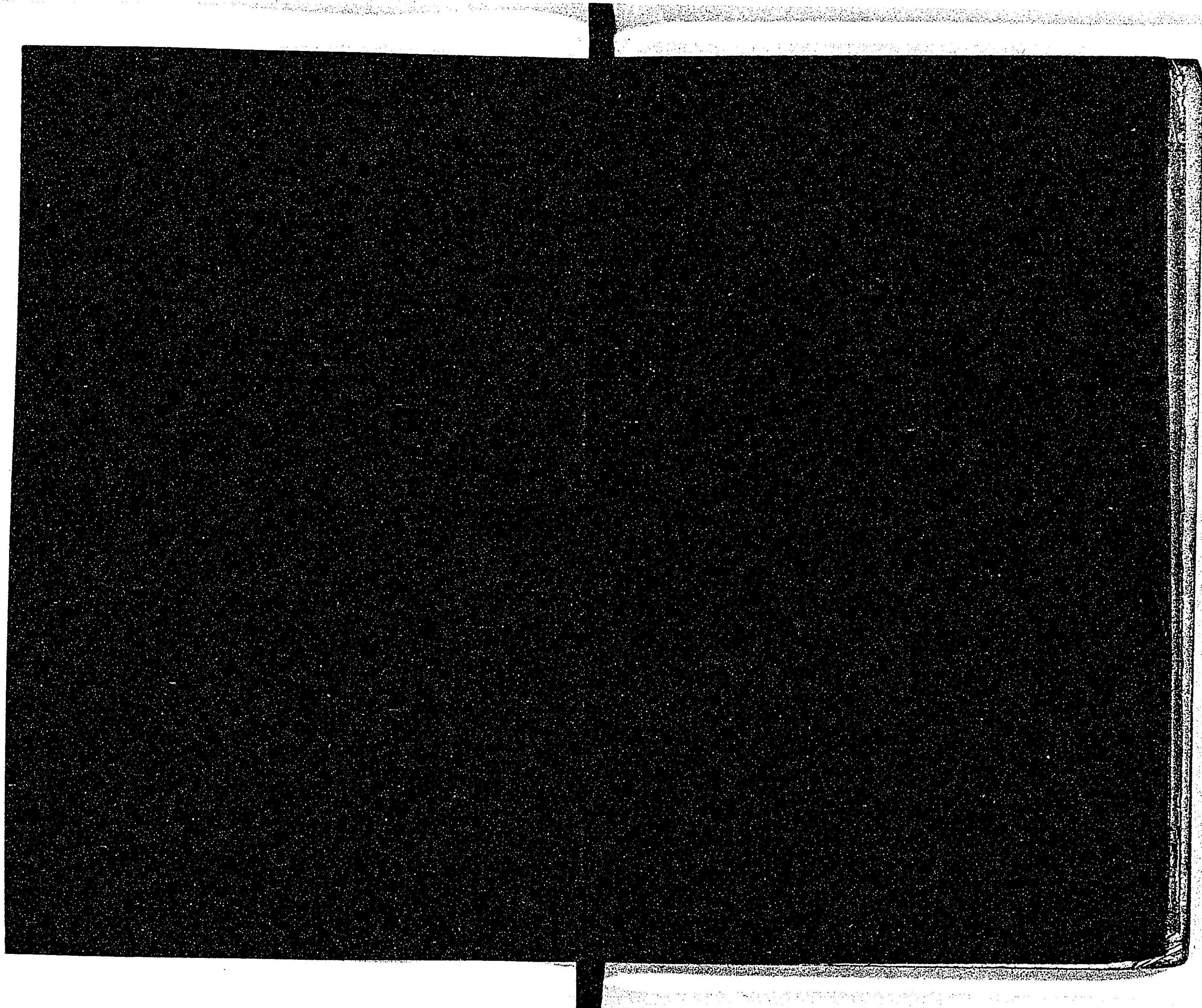
高橋五郎先生著

日蓮論

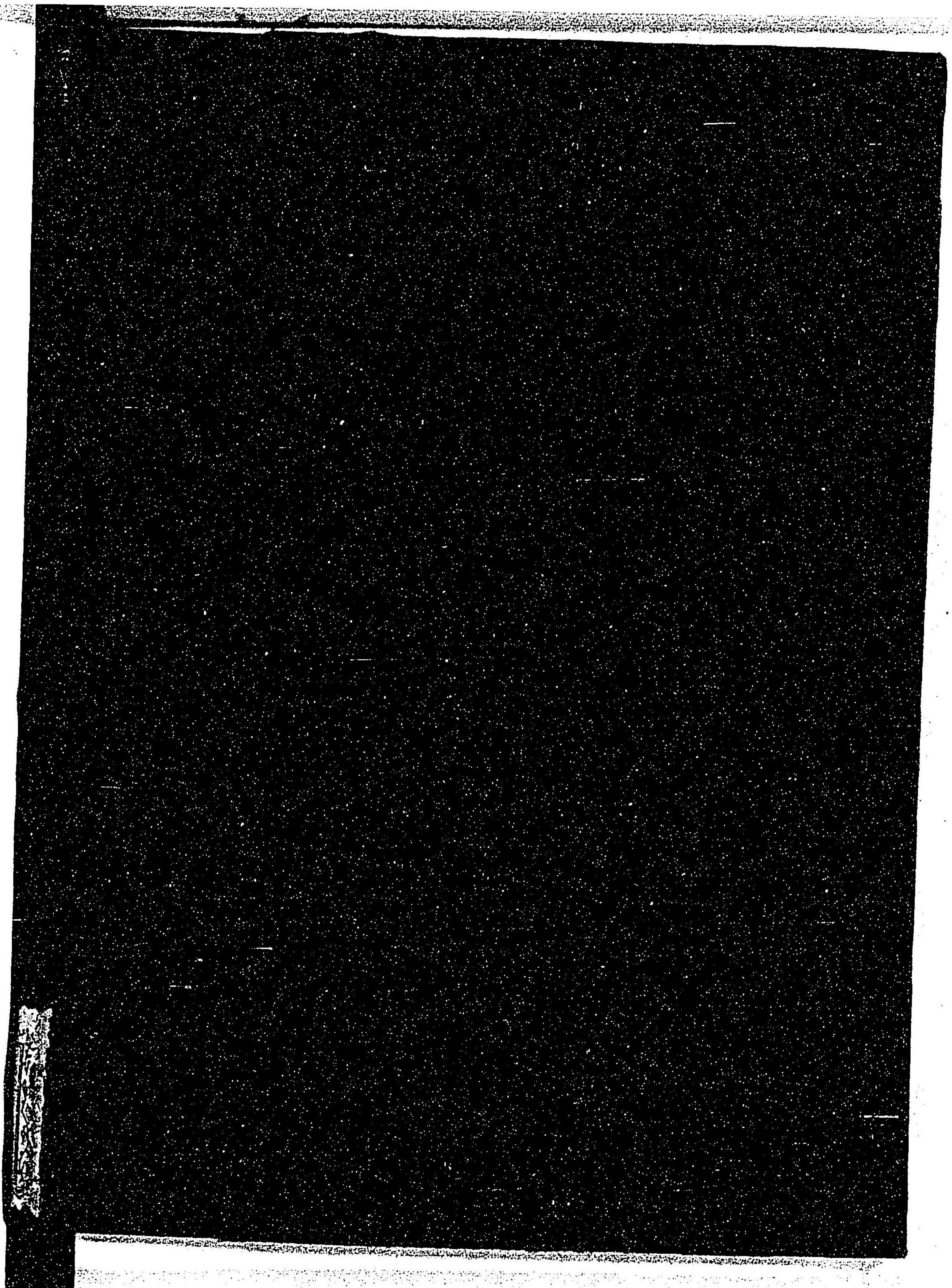
定價金六十錢 郵稅十錢

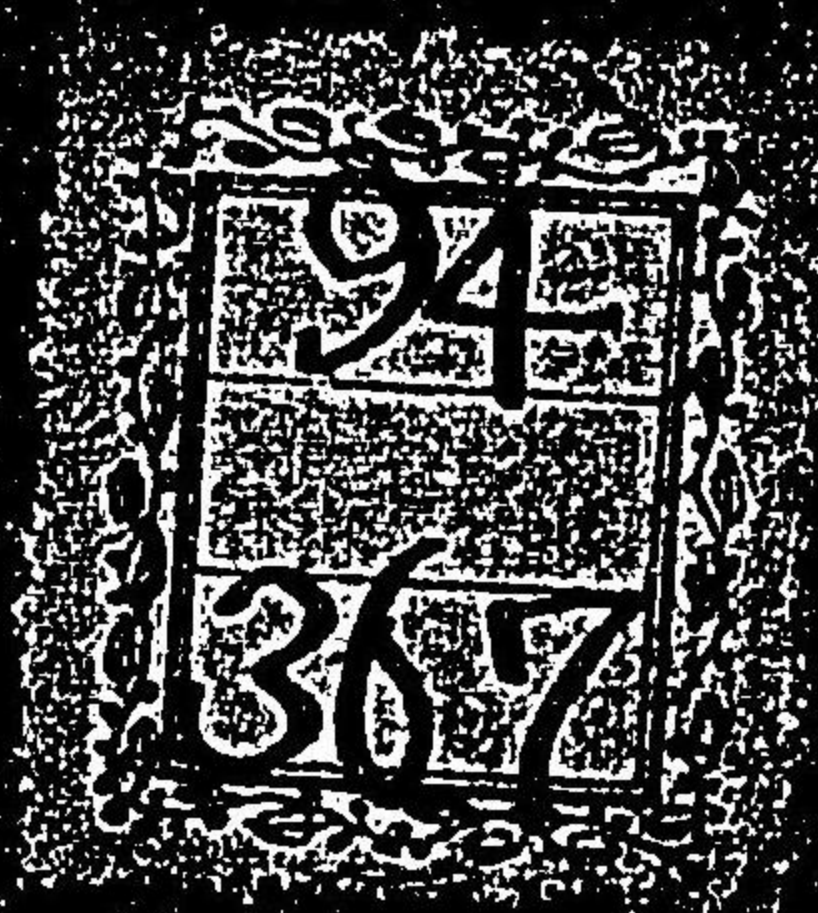
妙法弘通の聖人として崇拜すべきか將た一世を瞞着する奸雄として厭忌すべきか本書は著者が該博の智識と犀利の筆鋒を以て日蓮が大誓願を立たる精神より歴史上の活動を叙し政界に北條氏教界に念佛宗てふ大敵を控へ乍ら念佛無間禪天覽を獅子吼して四面楚歌聲裏に如何にして妙法を弘通せしやを論究して痛快の斷案を下し日蓮の眞面目をして紙上に活躍せしむ聖人か奸雄か請ふ一讀を吝む勿れ

94
367



94
367





019617-000-5

94-3.67

禪觀錄

加藤 咄堂

峯 玄光 / 著

M38.7

ABG-0397



